

椋の道草 第40回 「俳諧雑感」

森 木声

俳句を始めてそろそろ12年。俳句が少し分かったような気になったり、まだまだと凹んだりの日々です。今回「道草」に寄稿の機会を頂きましたので、最近の雑感を書かせて頂きます。

その1 俳句は短い！その短さゆえに俳句は寡黙な文芸と言われます。私は俳句が寡黙だとは思いません。俳句はあの手この手で読み手に想像させる文芸です。ジグソーパズルのピースを3つだけ置いて全体を想像させるような物です。その成否は作者の出したピースと読者の想像力のマッチングで決まります。「物を出せ」とよく言われますが、ピースに客観描写を選ぶことが読者の想像を広げる上で有利だからだと理解しています。また「それは只事だ」と言われますが、読者の想像が膨らまないということです。ただ、読者の知らない或いは興味のない世界に想像は膨らみません。また、作者が想像させたい世界と読者が想像する世界が大きく異なることもしばしばです。それが俳句の難しさであり面白さでもあります。

その2 季語は読者の想像を増幅する！私見では、季語は俳句の短さ＝情報量の少なさを補うために進化した俳句独特のシステムです。それは古今の名句を全て本歌取りとしてしまう強力な情報増幅機です。単なる「花」と季語の「花」では情報量が全く違います。無季俳句が無伴奏ヴァイオリンソナタなら有季俳句は季語世界というオケがついたヴァイオリン協奏曲です。ただし協奏曲でも「そこはオケ控えめに」と言いたくなる場面があります。有季であっても季語の本意と距離を置いた解釈が望ましい俳句もあるように思います。

その3 三句鑑賞

夕桜机の上になにもなし

階段が無くて海鼠の日暮かな

ねぱーるはとても祭りで花筵

三句とも有季定型ですが、方向性が大きく異なります。作者はお分かりと思うので敢えて伏せておきます。どの句も想像が大きく広がります。私は3人の画家の絵画を想像しました。

夕桜：空虚で静溢なハマスホイの室内画

階段：オブジェが空間に溶け込むターナーの風景画

ネパール：天衣無縫で幻想的なシャガールの前衛絵画

さて皆さんは何を想像されたでしょうか。